
HIROSHIMA

醤油

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HIROSHIMA

【著者名】

NIZURU

【あらすじ】

1945年8月6日の出来事

醤油

広島市に住む咲子、太一は幼馴染
戦争の中でも、楽しく暮らしていた

そんな日常を、一瞬にして

奪われるなど、誰も想像しなかつた・・・

(前書き)

初投稿です
よろしく御願いします

季節はすぐですが

原爆を、テーマに作りたいただきました

「待つて！そつちは危ないよ。」

少女は誰かに、呼びかけた

「そんなことねえよ、咲子は昔からおそれなんじや」

少年は、少し調子に乗ったような感じで返した

バタン！

少年は、言つた瞬間物産陳列館の階段で転んでしまった。

少年の白い肌から、鮮やかな血が流れる
少し涙目になつていてるが、男なのだと黙りプライドからか、必死に
堪えているのがわかる

「あ～それ、見た事か！川で洗つて来て、手当してあげる」
咲子は呆れた様子で、洗つてくるよう指示する

「これでよし、太一はこうこうしてるんやから、氣をつけんと危な
いねえ」

「う、うるさい！」

幼い2人のやり取りは、微笑ましい

「怪我しちゃつたから、一回お家帰ろね

「あ、咲子ーあ、あのー、おれ・・・」

「ん？ どうしたん？」

「なんでも無い。戦争終つたら、言ひづ。」

太一は顔を真っ赤にして視線をそらしながら走り出す

昭和20年8月6日7時50分

2人は、陳列館から1キロほど離れた家についた

「もう！お前はまたそんな怪我して！
いごいごせんと行動すればよかのに！…」

太一の母、明子は叱りつける

10歳の太一には、落ち着きと言つのが少し欠けているため
毎日の様に注意されている

その光景ももう見慣れたので、今更驚かない

「また怒られたね」

咲子は向かいの家から会いに来た

「もう、慣れた。どうする？ また行く？」

「うん、また行くの疲れた」

1キロ以上離れている、陳列館にまた行くのはいくら若いからと言つても

流石に疲れるものだ

8月の照りつけるような暑さも、体力を奪う

2人は、家の前で遊ぶことにした
縄跳びをしたり、ケンパをして遊んだ
楽しい時間は過ぎるのが早い

8時15分を回った

あの悪夢の時間までカウントダウンが迫る

昭和20年8月6日8時15分17秒
広島上空、原爆投下――。

辺りには、爆風が立ちこめ、爆心地に近い者は一瞬にして灰になった

2人のいたところでも、被害は大きく、2人の両親は死亡
2人も火傷を負つたが、息はあつた

「咲子！大丈夫か！？？」

「うん、太一は？」

「大丈夫だ！」

2人が見た光景は、まさに地獄という言葉がよく似合っていた。
それでも足りないかも知れない。

それほど酷い、光景だった

皮膚が火傷により融け、泣き叫ぶ人々の声。
目と耳を塞ぎたくなる

目に焼き付いて離れない。忘れてても忘れられない光景

幼い2人には、余りに刺激が強過ぎる

辺りの気温が異常に暑かつた

その暑さに耐えきれず、川に飛び込む者が続出した

ふたりは、とつさにそこから離れた

我武者らに、行き先も決めず、只管に走り続けた

気づいたら、家に来ていた

両親の亡骸のある筈の家、家の原型を留めていなかつたが、
2人にとっては、家なのだ

咲子が泣き出した。

気温により、ほぼ全身に火傷を負っていた

痛さにも、親を亡くした絶望にもどうしようもなく涙がこぼれ落ちる
太一は、どうしてやる事も出来ずもどかしく思つていた

「大丈夫・・・おれが一緒にいてやるから・・・」

そう言つて、咲子の肩を優しく抱く

「うん・・・」

少し間を空けて、咲子が頷いた

2人とも、火傷が酷く、動く事が困難になつていた
その場に手を繋いで倒れこんだ

深く溜め息をつき、一気に体の力を抜く。

「……にはもう、誰もいない

2人だけの世界のような気がした

そのうち、ずっと動かないでいると

雨が降つて来た

今まで見た事のある雨とは違い、

『黒かつた』のだ

暑さにより、喉がカラカラに乾いていた

2人は飛び起きて、夢中になつて黒い雨を飲んだ

ずっと、飲んでいたら、咲子が急に吐血した

「！？」太一は急いで駆け寄る

咲子はもう、完全に弱っていた。

「おい！咲子！しつかりしろ！！死ぬな！！！」ゴフッ

太一も吐血をしながら必死に叫んだ

「……めん……ねえ、さつき言いかけてた事……

なに？」

力の無い声で、言った

「好きだ！！だから死ぬな！！！！死ぬなんて許さねえぞ……」

「う……れしい……ごめん……ね……ゆるして……

•
•
ね

咲子は微かに微笑み、目を閉じた

「だあいすき」

そう言つて、咲子は太一の胸の中で息絶えた。

喉が切れる程叫んだ

悲痛な声を聞く者はいなく、

孤独はかりか募つて行つた

それから、すこしずつ、その場に到れ込んだ

お・れ・れも・だめ^二ほいな・わわい・ま

ごめん

そう言ひ、目を閉じた

目が覚めたら、そこには、青い空
色とりどりの花が咲いている花畠、この世の物とは思えない程奇麗
な世界

グイ

だれかが太一の手を引っ張つた

咲子だ。

火傷の後はなく、きれいな顔で微笑んでいた

「行こ」
「うん」

2人は手を繋いで歩いて行つた

2人の亡骸は、手を繋ぎとても穏やかな顔で眠つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8748p/>

HIROSHIMA

2011年1月9日06時13分発行